囲碁と手談と笑い

八王子囲碁連盟会長　成田　滋

2020 年 6 月 17 日

今年の 3 月から、私どもの暮らしは音楽でたとえますと「テンポがくずれ、音のバランスが狂い、不快なもの」となりました。家に閉じこもりがちとなり、「今日は何回笑ったか」と振り返る毎日となりました。こうした日常でわずかな救いとなったのは、いつか読もうとしていた世界文学全集を読み、録画していた劇映画を観、文部省唱歌やわらべ歌、落語を聞く機会があったことです。

人の感性をくすぐる美しい自然、苦難と努力という強さから生まれたものが芸術文化です。自然の出来事に良いも悪いもない、考え方によって良くも悪くもなるということを芸術作品は私たちに訴えています。破壊や開発といった自然でない行いが、自然でない混乱を生んだのです。はやり病は人間が自然の営みに抗って生まれたものです。

芸術文化は「人間らしく生きるための糧」といわれます。人と人とを結び付け，相互に理解し，尊重し合う機会の一つに囲碁の対局があります。碁は「手談」ともいわれます。相手に共感する心を石を通じて体験するのです。勝っても負けても、妙手をうってもポカをうっても笑いがこみ上げてきます。

文豪シェイクスピアは云います。「どうせ年をとるなら、陽気な笑いでこの顔にシワをつけたいものだ」

2020 年 2 月 17 日の「初の女性囲碁大会」